# プリンセスコネクト！
# リダイブ

にゃ～く

## 【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

私はヤンデレも好きです。

※

1. 独自設定、独自解釈
2. ネタバレ有り

# 目次

仮想編
これからも日常 ―――― 1
いつもの ―――― 7
現実編
バッドから始まったハッピーエンド 12

# 仮想編
# これからも日常

街

「クスクス……クスクス……」

街中を1人の女性が歩いている。名はエリコ。2本の角が頭から生えているが、1本は欠けている。はだけている服を着ている彼女はある人物を見つけた。

「今日は討伐か収集、どっちにしよう……？　」

悩みながら仕事を選んでいるのは、エリコの想い人であるユウキだ。彼はプリンセスナイトという希有な能力を持っていて、その効果は周囲にいる女性の能力を上げるもの。

「あなた様どうかしましたか？」

「あっ、エリコさんおはよう」

ぎゅっ

さりげなく腕を組むもユウキは気づいていない。しかしこの反応はエリコにとって

は予想済みなので彼とお話をする。
「何やら悩んでいるようですが……見せてもらっても？　」
渡された内容はどれも簡単な依頼だ。この程度ならば悩むことがないと思ったが、彼は記憶喪失である事を思い出し唇を噛む。
エリコが初めて出会った時からユウキの記憶は失われていた。彼女は彼をこんな姿にした敵を必ず、永遠の苦しみを味あわせてやると決めている。
「エリコさんは何がいいと思う？　」
「そうですね……こちらがよろしいかと……」
そう言って選んだのは魔物討伐。ユウキに理由を問われたエリコは、『私は収集が苦手な事と運命の伴侶であるあなた様と愛を深める為です』と当然のように答える。
ユウキは微妙な表情をした。

――――――

ウキキーという魔物はサルの魔物である。特徴的なのは自慢の怪力を使った岩投げだ。大きな岩を軽々と遠くへ投げるので、もし戦闘になったら早めに倒すと良いだろう。
「あなた様！　伏せて！　」

「……!?」

……草原ではたった今ウキキー達を倒した所だ。

「エリコさん。怪我はない？　」

「クスクス……私を案じてくれるのは嬉しいですが、あなた様の方が心配です」

エリコはユウキの体を入念に調べて、目立った外傷もないと分かると彼女は安心した。

「それじゃあ、早く帰ろうか」

「……はいと言いたい所ですが既に……夜になってしまったので、ここで野宿をした方が安全かと」

ユウキはコッコロが心配だから早めに帰りたい。しかしエリコがいつの間にか伝書鳩を使い、コッコロに連絡していた。ユウキと2人きりになる為の努力は傍から見ても恐ろしく熱心になる。

兎に角エリコ達は近くにあった洞窟の奥へ入った。

「魔物の巣はないようだ」

「ええ、洞窟で戦闘してしまうと魔物共々、生き埋めになってしまいますわね」

「それは怖いな」

「クスクス……私も怖いです……クスクス……」

２人は談笑しながら周りを確認する。幸い魔物の巣はなかったが後から魔物が来る可能性があるので、見張りの交代を行いながら睡眠を取る。

「……ちょっと離れてくれないかな」

「駄目ですよ♪　」

昼は気づかなかったユウキだが今は気づき、エリコの温もりから離れたいが離れられない状況だ。彼女の方はというと、ニコニコと上機嫌である。

そのまま時間が経ち朝日が昇る頃、ユウキが目覚めると近くにエリコの顔があり軽く驚いた。どうやら彼女も寝てしまい２人とも起きるまで危険な状況だったようだ。

２人は街に戻って報酬を貰う。……美食殿に帰るとペコリーヌ達３人が出迎えに来てくれた。

「お帰りなさい♪　……それともおはようございますでしょうか？　まあ兎に角無事に帰ってきてくれて良かったです♪　」

「はぁ、あんた大丈夫？　あんなのと一晩過ごすなんてすごいわね」

「主様、よくご無事で♪　」

３人の内２人は抱きつき１人は感心したように近づく。

「あの娘は有名なのか？　」

「むしろあんたが知らないことに驚いてるわ……」

「まぁまぁ、主様は記憶喪失なので知らないのも無理はないかと」
「わたしは一度お会いしたことがありますけど、とても一途な方でしたね～♪　……と、おや？　あなたの首筋についてるキスマークのようなものは何ですか♪　」
　ペコリーヌから渡された手鏡で確認すると彼女の言う通り、首に唇の形がついていて、それを3人はじっと見ている。
「主様、とりあえずお風呂に入って汗を流しましょう」
「そうね。昨日は一度も風呂に入ってないでしょ、今のあんた少し臭うから早く入りなさい」
「あ、ああ」
　キャルとコッコロがお風呂に入ることを強要する。疑問が湧いたが急かされて何も聞けない。
　……風呂場に入るとコッコロが水着姿のままで入ってきた。美食殿では2ヶ月前からユウキの世話を3人が行っている。何度拒否しても頑なに止めない。
　体を洗う為の洗剤を使ってコッコロはユウキを泡まみれにする。年下とはいえ女性に洗われるのは恥ずかしかったが、この2ヶ月で慣れてしまった。
「痒いところはありませんか？　」
「ないよ」

汗を流してさっぱりとしたユウキが居間に戻ると、色とりどりの食事がテーブルに並べられている。魔物を使った料理がないことからキャルが担当のようだ。

「いただきます」×４

――――――

この時、料理をすごく美味しいと褒めたらキャルの尻尾がピンッと立つ。

……今日もランドソルは平和である。

# いつもの

ランドソル広場

「お兄ちゃん～♥？　アカリはここですよ～♪　」

「やっと来たわね。アンタ時間かかりすぎっ！　」

今日はヨリとアカリの買い物に付き合う日だ。彼女達の許へ行く際、美食殿にエールを送られながら出かけた。

「ごめん」

「今回はどこに行ってたのよ？　」

「行ってないよ。ただ、エリコさんの実験を手伝いしてただけだしね」

「えぇ……大丈夫？　」

「うん」

「……エリコさんって胸が大きい人？　私もあれぐらい欲しいな～」

「そうだよ」

「アカリはどんな目で見てるのよ……というかアンタも真面目に答えんな！　」

どうやらこの2人もエリコを知っているらしい。ヨリは『壊し屋（デストロイヤー）』の部分を知って心配しているが、アカリは彼女の体型を見て羨ましいと思っている。

姉妹でも他人に対する考えは違う。

「エリコさんて結構有名なのか……」

「お兄ちゃん気になりますか～」

「まあ……悪い意味だったら何とかしたいなとは思ってる」

「それは大丈夫とシノブから聞いてるわ」

ユウキのお人好しに呆れながらヨリが答える。その答えに彼は案の定喜ぶ。しかしアカリ的には面白くないと感じて、ユウキの腕を引っ張りお店に行くための足を動かす。

「……もう、そんなことよりアカリ達と買い物に行こう！　」

「あっ、い、痛いから離してくれ」

「駄目♥？　反対側はお姉ちゃんね♪　」

「……わ、私は手を繋ぐだけでいい」

1人は腕を絡めてもう1人は手を繋いでと、少し奇妙な3人組はお店に向かって歩く。

……目的のお店に着いて数十分。ユウキは居心地が悪く店内で縮こまっていた。

「これとこれ、どっちがいいかな～。お兄ちゃんはどれが好き？　」
「ワンピース型の水着」
「あはは、それはあまり露出してないよ～♪　」
「アカリこういうのは普通でいいのよ、普通で。だからアンタはこれが好きでしょ」
「ワンピース型の水着で」
「ワンピース好きかっ！　」
　ユウキにとって水着は少しトラウマの存在となっている。以前モニカ達、ヴァイスフリューゲル組と海に出かけた際、彼女達の数名に襲われかけたからだ。
　そのことを話すと姉妹は『知ってる』と言い、迷いなくワンピース水着以外を選んで買う。海での出来事を知っていることにユウキが驚き理由を聞く。
「その話ね……シノブさんとイリヤさんにモニカさんが愚痴ってたわ」
「……」
　今度会った時、モニカには飴玉などのお菓子をあげようと思うユウキだった。

---

　買い物も終えて日が暮れた頃。ユウキは荷物持ちとしてヨリ達が買った物を入れた紙袋を運んでいる。……運び終わり彼女達とお茶をしていたが途中からゲームをする

ことになっていた。
「よしっ私の勝ち～♪　」
「んっ～♥？　お姉ちゃん強すぎるよ」
「ヨリは強いな」
「はぁ、アンタもかなり勝ってるじゃない」
　テーブルゲームを行いヨリが勝つ。これまでの戦績はユウキ５　ヨリ５　アカリ３となっている。
　……時刻は夜になってユウキは帰るのだが何やら様子がおかしい。
「……っ、……何だか、眠い……」
「……だ、大丈夫!?　」
「……私、お布団用意するね♪　」
「ええ。頼むわ……♥？　」
　寝てしまったユウキを２人は布団へ運ぶ。そうして姉妹は彼の頬に接吻をして、明日の朝まで愛をぶつけた。
　数日後。吸血鬼であるイリヤが住む場所に、ヨリとアカリが報告書を渡しに来ている。
「はい、今月の分」

「とっても～楽しかったよ～♪　」
「そ、そうか」
　満たされている2人にイリヤは苦笑する。渡された報告書の中身は端的に言うと、簡単な感想文とユウキの状態だ。
「……ふむ……ふむ……」
　中身を見終えてイリヤはヨリ達に質問をする。これは何度も聞いたが同じ答えであった。
「なあ、今度こそ「絶対に嫌」」
「まだ何も言ってないのじゃが……」
　ヨリ達は予想通りの答えを出す。彼女らがイリヤを見ている目は薄く濁っていて、イリヤは怯むがもう一度問う。
　しかし彼女達は首を縦に振らずに意志は固い。その様子にうんざりとする。
（……わらわも人の事は言えないが、ユウキの周りには面倒ばかり持ち込む女が多いのう……）
　今日もランドソルは平和である。

# 現実編
# バッドから始まったハッピーエンド

彼らはもう一度覇瞳皇帝を倒した。
そして……。
「……はっ……ここは」
目覚めたユウキが最初に見たのは白い天井だった。辺りを見回すと現実の病院に似ている。
しばらく周りの状況に理解出来なかったが、どこかで聞いたような声をした誰かが扉に、寄りかかってユウキに声をかけた。
「少年、おはよう」
「晶さん……」
「その様子だと記憶は戻ってるみたいだ」
「……はい……」

「どうした英雄さん。キミ達は現実に帰ってこれたんだよ」
「あっ……」
晶という人の言葉にユウキはアストルムで起きた出来事を細かに思い出す。
「そうか、俺達はやったのか……」
感極まっているところを晶が肯定する。
「ああ、そうだ。少年達のおかげでミネルヴァやフィオが自由になって世界は元通りになった」
「ええ、そうみたいですね」
拳を握りしめていたユウキはあることも思い出した。ペコリーヌ改めティアナ、コッコロやキャル、そしてユイ達。
「晶さん……彼女達は大丈夫ですか？ 」
「問題ない。別の病室で静かに起きているだろうね」
「良かった。彼女達にもお礼を言わないと……あっ」
ベッドから降りようとすると、ユウキはバタンッと転んで床とキスをする。どうやら現実の体を使ってないので筋肉が衰えていた。
その様子を晶が笑いながら助ける。
「ははは っ♪ 貧弱な英雄も面白くていいな」

「笑えませんよ……」
「そうだな。とりあえずリハビリをしないとね」
「ははは、そうですね」
こうして世界規模の問題に値する事柄は解決された。どこにでもいる平凡な人達によって……。

---

その後ユウキはリハビリをしていた。最初は思うように動かない為戸惑っていたが、今は少しふらつくが補助なしで歩けることが出来る。
ユウキ達がいる病院は国連が管理している場所だ。病院の敷地内だが、一度外に出ると違和感があるのに懐かしい気分になっていた。
ティアナ達に会いたかったが、彼女達もリハビリをしていてユウキに会いたくないらしい。
晶が言うには以前より痩せているとは言え、このままの姿では女が廃るとのことだ。
あまり気にしないと言うと、晶はボイスレコーダーを見せて『流していい？　』とユウキは焦って謝る。
「……ユウキ……様……！　」

「エリコさん？　」

病院をリハビリがてらに歩き回っているが、誰とも出会わなかった。不思議なこともあるものだなと思っていると、見覚えのある人物と出会う。

「……お、おはようございます……私はこれで」

「？　」

倉石恵理子。アストルムではエリコと呼びユウキを勝手に『運命の人』にして、現実も仮想でも彼に執着していた女性だ。彼女はユウキが会いにくい女性の1人で、どう対処するか考えてもいた。

しかし彼女は偶然ユウキに会ったにもかかわらず、挨拶だけして立ち去る。あまりのことにしばらく戸惑っていて、通りかかった医者に心配された。

……彼の懸念は思いもよらない出来事を引き起こすことになる。